淡路植物採集行

江越千代子

雨にぬれ霧にくれゆく猪ノ鼻に碧く沈める
りんどうの花

うつむけるみやまうづらを掌にかばひ雨足
はげしき山尾根を急ぐ

雨止みしあとの藪かげ露しげきなかにささ
ぐさ静かにゆるる

黙しつつ登る三熊の山かげに雨にうたるる
ささぐさ見えて

山かげの片側道のぼたんづる眸にしみて愛
し淡きくれなゐ

砂礫道瀬の岩ふみてゆく尾根になつふじの
花やさしくゆるる

シャラジャラとたけにぐさの実玩具にせば
わが垂髪の頃甦る

削られし山肌の土砂にうもれゐつさんきら
ひはいつぱいに紅き実つけて

見て過ぐるかなめの秋芽赫く赫く落陽もま
た燃え果てむとす

あへぎたる夏の酷しさ今は忘れ掌にのせて
見つぶどう一ふさ